

 **東京芸術座** **東京芸術座**

〒177-0042 東京都練馬区下石神井 4-19-11  
TEL 03-3997-4341 FAX 03-3904-0151  
E-mail [tougei@tokyogeijutsuza.co.jp](mailto:tougei@tokyogeijutsuza.co.jp)  
<http://www.tokyogeijutsuza.co.jp>

《名作劇場》

**上演作品紹介**

*since 1959*

## 名作劇場のあゆみ

劇団東京芸術座は、戦前の築地小劇場の時代から日本の新劇運動の旗手として活躍してきた演出家・村山知義を代表とする新協劇団と、俳優・薄田研二を代表とする中央芸術劇場とが合同して、1959年に結成されました。

私たちは創立の翌年から、情操教育の一助となる演劇を全国の青少年に届けるため、名作劇場（学校公演）を開始しました。

1960年当時、少数の学校のみで実施されていた芸術鑑賞教室は、その後先生方と創造団体との努力と連携によって全国に広がってゆきました。

しかしながら今日、学校を取り巻く諸般の事情から子どもたちの舞台芸術を鑑賞する機会が減少しています。

“芸術”は青少年の感性や教養を深め人生に豊かさをもたらすために必要不可欠です。

私たちは、これからも名作劇場の活動を続けてまいります。



東京芸術座 公演

# 医者者の王子

作／岡田鉄兵  
演出／北原章彦

スタッフ 作 岡田 鉄兵  
演出 北原 章彦  
美術 幡野 寛  
照明 関 定己  
音楽 栗木 健  
効果 馬上 真勝

登場人物 西山 悠人  
西山 淳子  
五味 清  
五味 ふみ  
五味 カナ  
五味 豪太

## あらすじ

医学部の受験に3度失敗している西山悠人は、開業医の両親を持つ20歳の浪人生。夏期講習が直前に迫ったある日、悠人は現実から逃げだした。大阪の家を飛び出し無我夢中でロードバイクを走らせるが、突然の雷雨にタイヤを滑らせクラッシュ。通りかかった五味清に助けられ、奈良市郊外のアパートに運び込まれる。

五味清とふみ夫婦は、自宅の隣で経営するアパートに住みこみ、管理人をしている。夫婦は13年前、大学生だった20歳の長男豪太を東日本大震災の津波で失った。豪太の遺体は今も見つからず、夫婦はその死を受け入れられずにいる。夫婦にはもう一人、自宅に独り残されたまま引きこもってしまった長女カナがいた。

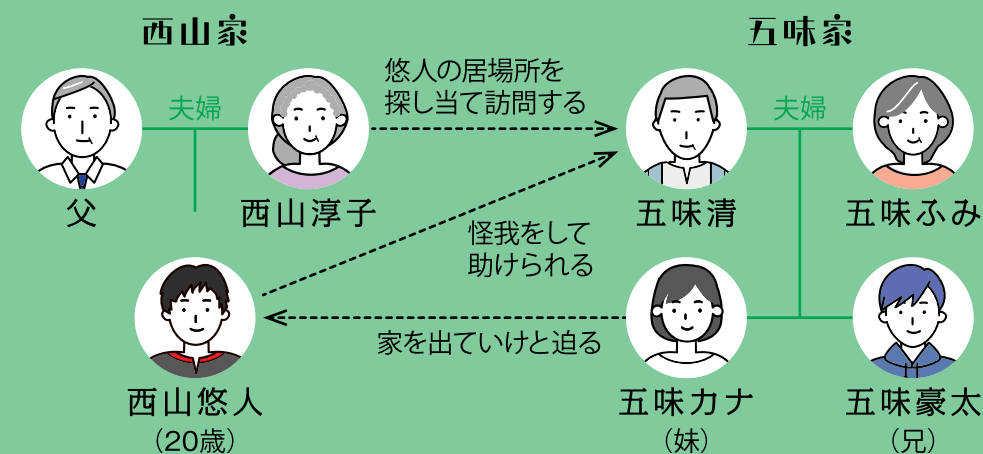
悠人が五味夫婦に助けられた翌日、アパートに悠人の母親が現れる。「医者になり病院を継ぐこと」をめぐる悠人と母親は激しく衝突。ついに母親は「家族の縁を切る」と最後通告を突きつける。追い詰められた悠人の苛立ちは、彼を気遣う清に向けられ「子どもの死にしっかり向き合うべき」だと迫り、動揺した清も感情を爆発させる。その夜――、カナは家を出る。

家族から自立しようとするカナの決心に誘われたように、アパートに豪太が現われ、清とふみの13年間の葛藤と苦しみを解きほぐすように語り始める。自分の生命が尽きるまでを話し、もっと生きたかったと悔しさと無念を口にし、最後に家族への別れを告げ消えていく。

翌朝、カナが家を出たことを知った清とふみは、息子が暮らした東北の地をもう一度訪ね、自分たちのペースで息子の死に向き合う決心を悠人に伝える。

――そして悠人は4度目の医学部受験のために、大阪へ向けてペダルを踏み出す。

## 【 相 関 図 】



## ご挨拶

原作者 岡田 鉄兵



大阪府出身 奈良大学文学部卒業  
大学卒業後、テレビ番組のコントやコメディ台本、映画シナリオや戯曲を執筆。  
『大仏と小鹿』第42回城戸賞・佳作  
『死にぞこない男の夏休み』第43回城戸賞・佳作  
『出戻りサト子』第46回城戸賞・佳作  
『南吉野村の春』第21回劇作家協会新人戯曲賞・最終選考  
2019年・劇団昴で上演  
『百歳センセイ』『日本の劇』戯曲賞2016・最終選考  
『螢火（ほたるび）』『日本の劇』戯曲賞2021・最終選考

転機とは、節目になる年齢に訪れやすい。最初が18歳。大学や専門学校に進学、会社に就職など。

しかし、そこで失敗してしまうケースもあります。受験に不合格で浪人。進学先や就職先でうまくいかず早々に辞めてしまう。いわゆる人生でつまずいてしまったというやつです。

本作『医者の子』の主人公もその一人。挫折をして家を飛び出し、日本一周の自転車の旅に出た。色んな人と出会い、経験をし、それを糧に成長していく。出会った人たちもまた彼に救われ、新しい道を見つけていきます。

若い頃はいくら失敗しても良い。道を外れることは決して間違いではない。時間が掛かっても自分なりの道を作れるかが大事なのです。

私自身もたくさん挫折をして来ました。なかなか賞が獲れず、目の前で酷評をされたこともあります。それでも好きだから書いて来られた。正直、今が成功か失敗か分からない。けれど、結果ではなく挑戦を続けたという経験こそが重要なのではないのでしょうか。

何度も人生の転機は訪れ、大人になっても乗り越えていかなければならないという内容にもなっています。

特に親になると子どもが悩んでいたたり落ち込んでいたら、自分の事よりも辛い。どんなことをやっても助けてあげたい、力になってあげたい。そういう子を想うストレートすぎるメッセージも盛り込んであります。観劇する子どもたちからは「ヤバイ！ キモイ！ ウザイ！」と声が上がりますが、たっぷり愛情を受け取って貰いましょう。

昨今は演劇を観るという機会が随分減りました。スマホやパソコンを使えばいつでもどんなものでも見られます。そういう時代だからこそ、生の演劇を観て欲しい。

演劇は舞台と観客が一体となり「一期一会の感動」が得られます。そこが他の芸術作品とは違う魅力だと私は思っています。

長々と書いてしまいましたが、大いに笑って少し感動して観たあとにちょっぴり考えていただけたら幸いです。

肩の力を抜いて、ご覧になってください。

## 家族の再生物語

演出 北原 章彦



### \*失敗から挫折

失敗が続くと意欲と気力の減退につながり、結果挫折を味わうことになります。主人公の西山悠人は医者家庭に育ち、子どものころから医者になるものと期待され成長します。進路を自ら決められない主体性に欠けた二十歳です。

父親へのコンプレックスを抱え、母親はヘリコプター・ペアレント。大阪風と言えばヘタレのボンボンの典型です。三度の受験に失敗、再起をかけたはずの6月全国模試にも惨敗。何もかも嫌になり自分探しの自転車の旅に出るのです。

物語は旅立ちの日の午後、ゲリラ豪雨にみまわれ山中で転倒するところから始まります。

### \*二つの嘘の出会い

悠人の嘘と五味夫婦の悲しい嘘が交差しながらドラマは進みます。五味夫婦に助けられた悠人は、浪人の末に医学部合格、夏休みを利用して日本一周の旅に出かけ転倒したのだと嘘の自己紹介。五味夫婦は東日本大震災の津波にさらわれて行方不明になった息子の死を受け入れることができず、息子とは音信不通だが東北で元気に暮らしていると嘘をつくのです。

悠人は同じ二十歳で命を奪われた豪太の人生を知り、震災で息子を亡くした五味夫婦の悲しみに思いを馳せることになります。悩める二十歳の西山悠人と愛する息子を震災で亡くした五味家族が、心の交流を通して再生・成長していく物語です。

### \*挫折から再生へ

悠人は生きている一分一秒がいかに尊いものであるか、生きているからこそ挫折があり、そこから立ち上がることができることに気がきます。

「医者になるのを諦めるのをあきらめた！僕は医者になりたい」

悠人は主体性を持って医者になる覚悟を決めます。私たちは少なくない失敗を重ね、大きな挫折を経験することがあります。それは苦しみをともないますが、生きていることの意味と人生の課題に向き合うチャンスを得ること、それが挫折の意味なのかも知れません。



悠人 医学部を目指す三浪生の二十歳  
何もかもが嫌になって逃げだしたが、  
その行く手をゲリラ豪雨に襲われた



ふみ エライ事になってるやん  
救急車呼ばか？



悠人 そんな大げさな。ただのすり傷です  
あの〜、ここって三重県？



清 奈良の月ヶ瀬やで



ふみ お父さんお母さんに連絡入れたんか？



悠人 してません



ふみ なんでや。たった一本の電話、ほんの数分の  
会話でも子どもの声を聞きたいんやで



カナ 早く出てってくれへん？  
邪魔やねん



悠人 理由を説明して？



カナ 似てるから  
・・・兄ちゃんと



悠人 音信不通の・・・  
豪太くん？



悠人 おかん!! なんでここ分かったん？



淳子 GPS



悠人 なんで家を出たか聞きたい？  
医者なるの諦めたから



淳子 悠人、絶対なりなさい  
そして西山病院をついで  
四浪、五浪の覚悟はできてます！



悠人 ボク、全部知ってるねんで  
豪太さん、東日本大震災で亡くなってん  
やろ？



清 生きてる！ ワシの息子は死んでへん！  
お前なんかと全然似てへんねん！  
ヘタレとちゃうんじゃ！



ふみ 今も行方不明者は、2520人おる  
亡きながら見つからんと・・・  
終わられへんのよ



豪太 ボクが誰かって？ 豪太やん  
震災のときのことを聞いてください  
コールタールのような色をした  
黒い塊がスローモーションのように  
迫ってきた・・・



悠人 なんで医者になりたいか？  
与えてもらうた人生を精一杯生きる！  
逃げたくない！



# 12人の怒れる男たち

TWELVE ANGRY MEN

東京芸術座公演

作／レジナルド・ローズ

訳／額田やえ子

演出／杉本孝司

装置／園 良昭

装置補／幡野 寛

照明／矢口雅敏

効果／馬上真勝

## あらすじ

1950年代末のニューヨーク。その夏、最も暑い日の午後。スラム街で起きた殺人事件の裁判が結審を迎えようとしている。被告はスラムに暮らす18歳の少年。被害者はその父親である。父親の胸に深々と刺さった少年の「飛び出しナイフ」。被告の有罪は確実視されている。

そして――少年の運命は、無作為に選ばれた12人の陪審員の手委ねられた。話し合うまでもないと、彼らは早々に予備投票を行う。結果は、有罪11票、無罪1票。無罪に投票した陪審員8号は「せめて1時間の話し合い」を望んだ。11人の陪審員たちの無関心、冷笑、蔑視、敵意に怯むことなく、陪審員8号は、有罪に対する「合理的な疑い」を提示する。

本当に裁かれるべきものは何か、そして誰か、男たちの議論は白熱する……。

●陪審員第二号  
気弱で、おとなしい善人。たいていの場合妥協的で、自分の主張を最後まで続けることはない。銀行員

●陪審員第一号  
陪審員長の務めを果たそうと、個性豊かな陪審員たちに翻弄されながらも、生真面目に努力する。高校フットボールのコーチ

●守衛  
●裁判長の声

●陪審員第三号  
力強く、説得力のある主張をする人物。自分と違う意見に耳を貸さず、独善的に振る舞う傾向がある。メッセンジャー会社経営

●陪審員第四号  
富と地位を持つ人生の勝者。事件への唯一の関心事は事実と論理の整合性だけである。感情的な議論を嫌う。株式ブローカー

●陪審員第五号  
スラムの出身であることに、ある種の強迫観念を持つ。権威や年長者に脅え、率直に意見を言えない。整備工

●陪審員第六号  
論理的な議論は苦手で頭の回転も良くないが、正直で純朴。ゆっくりだが、心に響く他人の言葉を受け入れる。ペンキ職人

●陪審員第七号  
明るく騒がしく、熟慮なしに素早く意見を言う。シニカルな言動の陰に、時代を生きる人間の姿が見える。セールスマン

●陪審員第八号  
社会に潜む、偏見や差別と闘う情熱を持つ。真実と正義を求める信念は「COMPASSION」に共感に基づく。建築家

●陪審員第十二号

社会的で明るい広告マン。世論のバーセンテージの観点から人間を考え、多数が正義と考えている。広告代理店勤務

●陪審員第十一号

一九四一年に来た、ヨーロッパからの避難民。故国での不正義に苦しんできた。未だ残る外国語訛りを恥じている。時計職人

●陪審員第十号

他人にも自分にも、人生の生きる価値を認めることが出来ず、誰に対しても、怒りっぽく辛辣な男。偏見が強い。修理工場主

●陪審員第九号

人生の敗者として暮らす老人。自由な生き方に憧れ、勇気を示すことが可能であった頃を想う日々を送っている。無職





## 優しくて気の弱い大多数

映画監督 山田 洋次

自信過剰、厚顔無恥、冷酷でエゴイスチックで傲慢、この戯曲でいえば、3番や10番のような俗物たちが、思えば私たちの国にどれほど跳梁跋扈していることだろうか。

たとえ全体の中の少数者であっても、このての人物が大声でわめき散らすと、大部分の、気の弱い、恥ずかしがり屋で、事を荒立てるのが嫌いな温和人々は、溜息まじりに黙り込んでしまう。

悪い事に、この俗物共に気に入られようとする、気の小さいのが現われたりする。

そして、ほんのひと握りであるはずのこの連中の意見が、結局は全体を代表するようになってしまうことが、ままたある。

そんなことを許してはならない、そのためにこそ民主主義という仕掛けがあるのだ、というメッセージを、「12人の怒れる男たち」は感動的に伝えてくれる。

大声を出すことも遠慮がちな、平和な日常をなにより大切に考えている人々が、そのおだやかな生活を守るために、お互いに心を通い合わせ、積極的に発言してゆくことが、遂にはこれらの、生命の尊厳、人権の尊さについてひとかけらの思いもいたさないような愚かな人間たちの心までも、動かしてしまうのだ、だからこそ人間は素晴らしいのだ、ということ、この戯曲を通して、現代の日本人はもちろん、アメリカ人も、極めて今日的な課題としてうけとらざるを得ないだろう。

# Guilty or Not Guilty



## 会議は苦手と みんな言うけれど・・・

演出 杉本 孝司

会議は“退屈で苦手”と云う言葉をよく耳にします。かくいう私も、実は会議は苦手です。この「12人の怒れる男たち」という物語は、「全員一致で結論を出さなければならない」という、アメリカでの陪審員裁判の“話し合い”の過程そのもので構成されています。つまり、「集団による意思決定の過程」そのものがこの芝居の全てなのです。

「面白くなければ芝居ではない」と言われる演劇で、みんなが“退屈で苦手”と云う「話し合い」のうちに舞台が終始するなんて・・・。一部の人たちが、「本当に面白いのかなあ？」と心配するのも尤もです。会議が退屈な理由は色々あるでしょうが、多くの場合、議題に対して結論が見えてしまうからかもしれません。あまりにも“簡単”に・・・。

このお芝居では、一人の陪審員が「そんなに簡単に結論を出していいのだろうか？」と異議を申し立てるところから舞台が始まります。12人中たった一人で反対意見を主張する陪審員8号は、今風に言えば“マイノリティ・インフルエンサー（少数だが強い発信力を持つもの）”として登場します。このたった一人の少数者は、“簡単な結論”に対して――

- ①表面的な“見かけ”に惑わされていないか？それは先入観ではないのか。
- ②自分の人生や利害に直接影響がない事柄と捉え「まあいいか」と深く考えずに“空気感”で結論を出してないか？つまり、無関心や無責任に陥っていないか。
- ③凝り固まった一面的なものの見方をしていないか？つまり、知らず知らずのうちに偏見に陥っていないか。

と「省察的懐疑」＝「信じたければ疑うこと」を、自分も含めた陪審員に一貫して粘り強く求めます。これは、観察⇒仮説⇒実験⇒検証⇒結論という科学の方法論と何故か一致しています。論理的であることは科学的であるということかもしれません。私の場合には、演出を考える時にこの方法を無意識に使っているようです。だから、この作品は私にとって芝居創りの物語でした。

論議の場合は、観察（議題の事柄を正確に理解し、他の参加者の云うことをよく聞く）⇒仮説（少数であることを恐れずに自分なりの意見を持つ）⇒実験・検証（それぞれの意見を実際に戦わせる）⇒結論（違う意見の中に共有できる一致点を探す）ということになるでしょう。

フェイクニュースや詐欺やデマの横行する現代社会では、皆さんも騙されないために、また人間らしく生きるために、これらの科学的思考や情報の活用能力（リテラシーの思考）を無意識に使っているでしょう。あなた自身の物語として、また、エンターテイメントとして、様々な「12人の怒れる男たち」をお楽しみください。



スラム街で起きた父親殺し

since 1983~



差別と偏見が渦巻き罵声が飛び交う



“12人の男たち”の評決は・・・



決定的な目撃者の証言



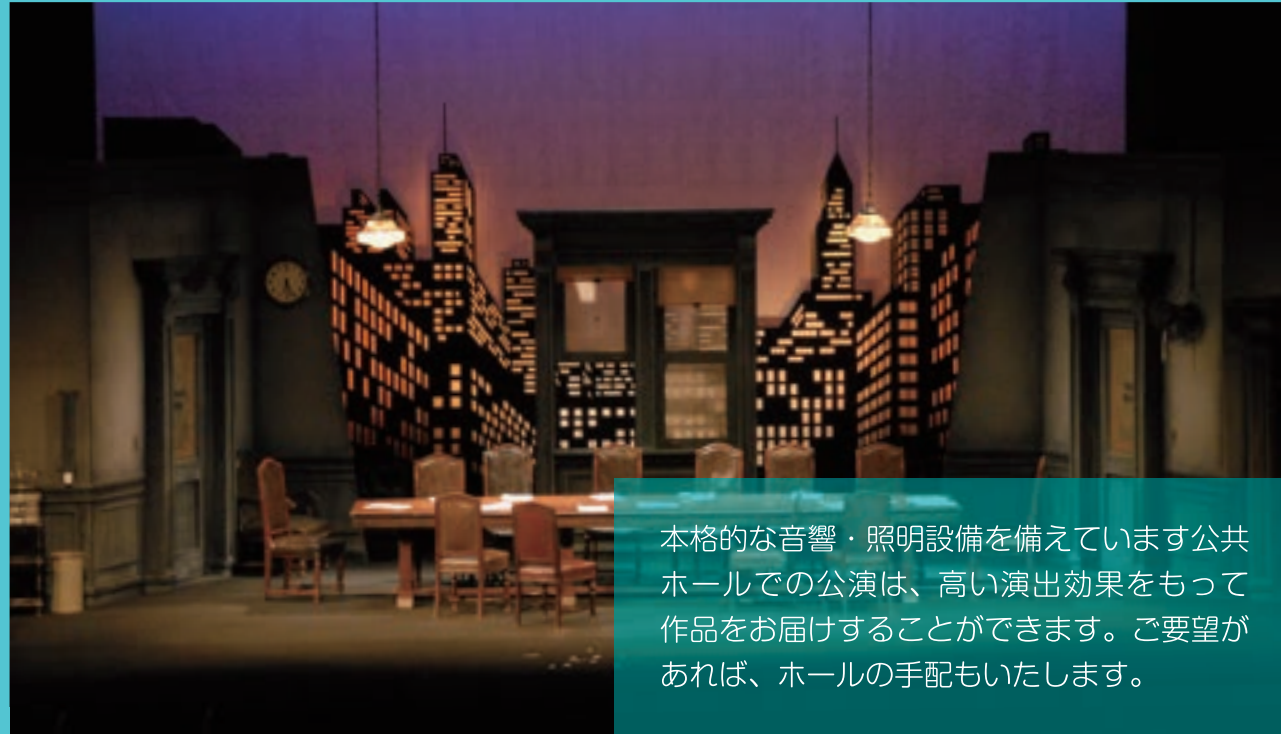
完璧と思われた事実が揺らぎ始める...



# 芸術鑑賞会のスタイル

芸術鑑賞会には様々な形態がございます。  
学校のご希望や状況に合わせ公演を行うことができます。

## 地域の公共ホールでの実施



本格的な音響・照明設備を備えています公共ホールでの公演は、高い演出効果をもって作品をお届けすることができます。ご要望があれば、ホールの手配もいたします。

## 学校体育館での実施



授業時間の確保や交通手段など、様々な事情により校外での芸術鑑賞会の実施が難しいという学校のお話を伺っています。そういった際には、学校体育館での公演も可能です。

### 【上演内容のご案内】

	医者の玉子		12人の怒れる男たち	
	公共ホール	体育館	公共ホール	体育館
上演会場	公共ホール	体育館	公共ホール	体育館
舞台設営	4時間	5時間	4時間	5時間
上演時間	1時間30分		1時間45分	
舞台撤去	1時間	1時間30分	1時間	1時間30分
照明設備	ホール設備	機材持込	ホール設備	機材持込
音響設備	ホール設備	機材持込	ホール設備	機材持込
運搬車輛	トラック1台(4トン)		トラック1台(4トン)	

※舞台設営・撤去にかかる時間は、ホールや体育館の状況により多少前後いたします。

### <作業風景>



大道具や機材をトラックから体育館に運び入れます



大道具や機材をフロアに広げて設営の準備をします



照明を吊り、舞台装置を組んでいきます



全ての準備が整いましたら、間もなく開場です

《名作劇場》 上演作品

- ミハルコフ作 うぬぼれ兎 1960
- 木下順二作 狐山伏 1960
- モリエール作 守銭奴 1961
- トルストイ作 イワンの馬鹿 1961
- ゴーゴリー作 結婚 1962
- 村山知義作 初恋 1963
- モリエール作 スカパンの悪だくみ 1966
- ゴーゴリー作 検察官 1967
- J・バリー作 はだしの貴族 1970
- ゴーリキー作 どん底 1972
- V・ユゴー原作 レ・ミゼラブル 1973
- 早乙女勝元原作 関口潤脚色 小麦色の仲間たち 1973
- シェイクスピア作 ヴェニスの商人 1974
- 小林多喜二原作 大垣肇脚色 蟹工船 1975
- 村山知義作 ベートーヴェン 1976
- 大橋喜一作 銀河鉄道の恋人たち 1977
- 勝山俊介作 回転軸 1977
- 山本茂実原作 大橋喜一劇化 あゝ野麦峠 1978
- 関根庄一編著 寺島アキ子脚本 翼は心につけて 1979
- 山本周五郎原作 結束信二・川池丈司脚色 赤ひげ 1981
- 本田英郎作 勲章の川 1982
- 松谷みよ子原作 橋本栄子脚色 私のアンネ=フランク 1984
- 吉村昭原作 本田英郎劇化 ふぉん・しいほととの娘 1985



ゴーリキー作  
「どん底」  
(1972年～)



シェイクスピア作  
「ヴェニスの商人」  
(1974年～)



山本茂実原作  
「あゝ野麦峠」  
(1978年～)



山本周五郎原作  
「赤ひげ」  
(1981年～)



本田英郎作  
「勲章の川」  
(1982年～)



吉村昭原作  
「ふぉん・しいほととの娘」  
(1985年～)



レジナルド・ローズ作  
「12人の怒れる男たち」  
(1986年～)



本田英郎作  
「野望の系譜 -壬申の乱-」  
(1989年～)



湯本香樹実原作  
「夏の庭 -The Friends-」  
(2000年～)



神品正子原作  
「Challeng'ed -遠い水の記憶-」  
(2005年～)

- 1986 ジュール・ルナール作 にんじん
- 1986 レジナルド・ローズ作 12人の怒れる男たち
- 1989 本田英郎作 野望の系譜 -壬申の乱-
- 1989 斎藤惇夫原作 平石耕一脚本 冒険者たち
- 1989 安藤美紀夫原作 さねとうあきら脚本 ウメコがふたり
- 1995 大橋喜一作 あわて暮やぶけ芝居 東京空襲3・10
- 1996 リリアン・ヘルマン作 小池美佐子訳 The Children's Hour 子供の時間-
- 1997 乾一雄構成 あの日私は
- 1998 平石耕一作 ブラボー! ファーブル先生
- 1999 平石耕一作 News News -テレビは何を伝えたか-
- 2000 湯本香樹実原作 夏の庭 -The Friends-
- 2003 旭爪あかね原作 平石耕一脚本 稲の旋律
- 2005 神品正子原作 Challeng'ed -遠い水の記憶-
- 2006 金城一紀原作 いずみ凜脚本 GO
- 2006 レイモンド・ブリッグズ作 いずみ凜脚本 風が吹くとき
- 2008 ジョン・スタインベック原作 杉本孝司脚本 はつかねずみと人間
- 2010 山本周五郎原作 川池丈司脚色 赤ひげ
- 2011 さねとうあきら作 おれはなにわのライオンや
- 2012 湯本香樹実原作 夏の庭 -The Friends-
- 2013 大橋喜一作 あわて暮やぶけ芝居 東京空襲3・10
- 2016 神品正子原作 Challeng'ed -遠い水の記憶-
- 2019 重松清原作 未来
- 2021 レジナルド・ローズ作 12人の怒れる男たち